

奄美群島の蝶類

岩 村 巖

Some Notes on the Butterflies Fauna of Amami Islands., by Iwao Iwamura

1963. 9. 10

渡瀬線をこえて、東洋区に入りたいというのは、私の長年の念願であったが、一昨年の春(1961)と、本年の夏(1963)そのチャンスにめぐまれ、奄美群島で蝶を採集することが出来た。奄美群島の蝶相に関しては、以前にも相当の人々によって報告されており、その大ざっぱな分布状態に関しては、大体判明したといっても過言ではない。しかし、もっと範囲をせばめた、いわゆるミクロの分布状態という点になると、未だ十分ならずの感が強くするのである。これからのべる採集報告は、その時の採集記録であるが、これら地方の蝶の分布上に少しでも役に立てば幸いである。

I 日程及びコース

a) 第1回(1961年3月11日～4月3日)

- 3月11日
浮島丸にて神戸出港(13.00)
- 3月13日
鹿児島県大島群沖永良部島和泊港着(18.00)
- 3月14日
和泊付近採集。沖永良部高等学校泊。
- 3月15日
和泊—知名間採集。
- 3月16日
進学に関する懇談会出席。採集中止。
- 3月17日
和泊採集。徳之島向け出発(17.00)
- 3月18日
大島群島鹿浦上陸—犬田布—鹿浦(泊)
- 3月19日
鹿浦—犬田布—鹿浦—面縄(泊)
- 3月20日
面縄付近採集(泊)
- 3月21日
面縄—亀津。徳之島高等学校(泊)
- 3月22日
亀津(10.00)～新古仁屋(14.00)＝住用村
新村(泊)
- 3月23日

住用村新村付近採集(泊)

3月24日

新村—宇検村湯湾(泊)

3月25日・26日・27日

湯湾—田検—湯湾(泊)

3月28日

湯湾(8.00)—新村—東仲間—川内—東仲間
(泊)

3月29日

東仲間—東城—城—東仲間(泊)

3月30日

東仲間—朝戸—小湊(泊)

3月31日

小湊付近採集(泊)

4月1日

小湊—朝戸—名瀬(泊)

4月2日

名瀬—浦上—名瀬(泊)

4月3日

八坂丸にて鹿児島向け出発。

b) 第2回(1963年7月22日～8月3日)

7月22日

名瀬向け鹿児島出港(17.00)

7月23日

名瀬(9.30)—小宿—朝仁—名瀬(泊)

7月24日

名瀬—小湊—朝戸—名瀬(泊)

7月25日

名瀬—朝戸—東仲間—新村(泊)

7月26日

新村付近採集(泊)

7月27日

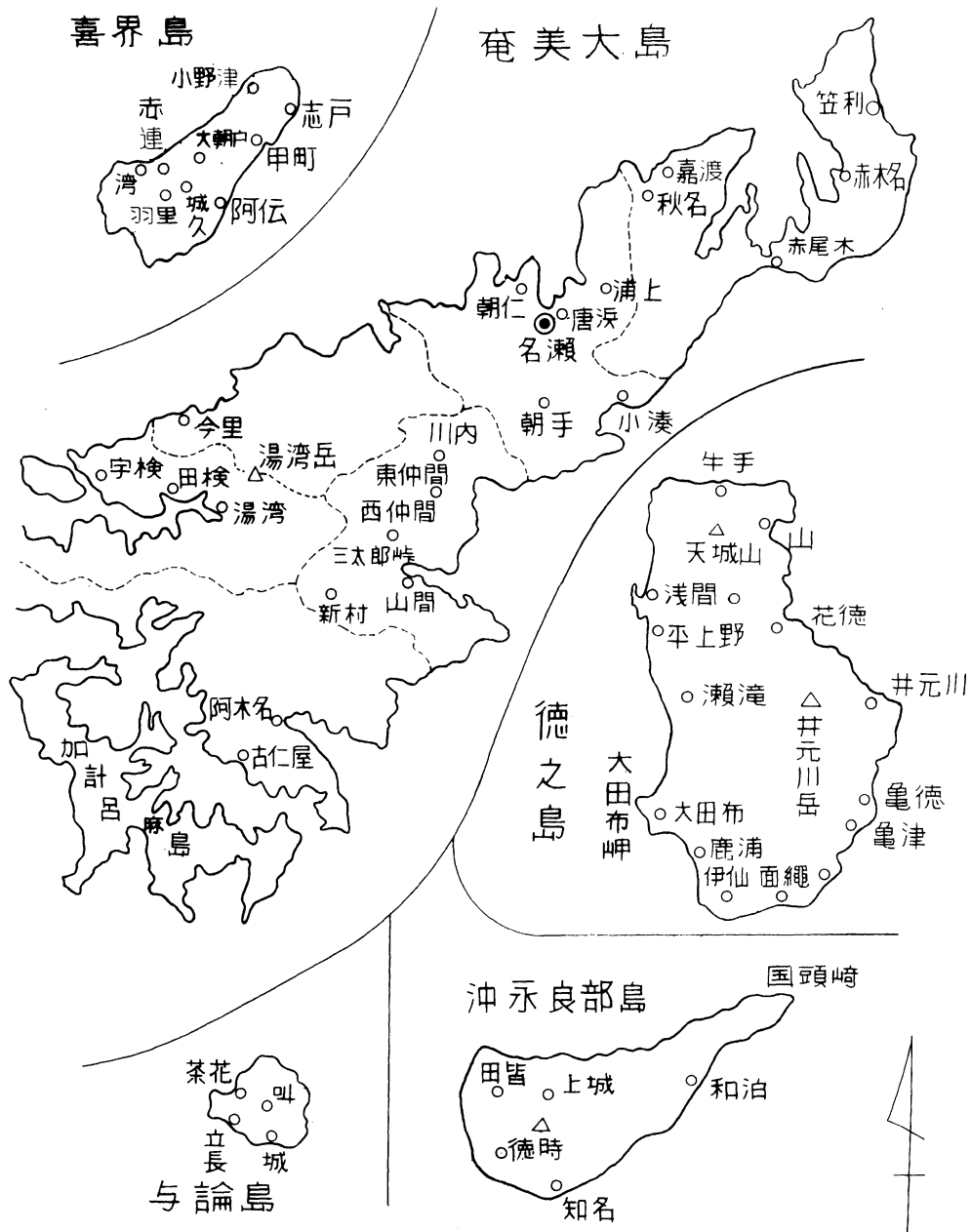
新村—西仲間—城—名瀬(泊)

7月28日

名瀬(9.00)—湾港(喜界島)—赤連—湾(泊)

7月29日

湾—坂嶺—大朝戸—中間—湾(泊)



0 5 10km

(1: 400,000)

(福田: 鹿児島県の蝶類より)

7月30日

湾一赤連一羽里一川内一浦原一湾 (泊)

7月31日

湾一~~名瀬~~ (泊)

8月1日・2日

名瀬一浦上一名瀬 (泊)

8月3日

名瀬 (9.30) 神戸向け出発

II 採集結果

Hesperiidae (セセリチョウ科)

1. *Udaspes folus* Cramer, (オオシロモンセセリ)

奄美群島の特産種であり、その内でも特に大島のみに見られる特産種である。しかも、同島においても、その個体数は決して多いとはいえない。これまでの記録によ

ると、5~10月にかけて採集されている場合が多いが、採集個体が少ないため、その生活史、発生週期等に関しては未だ不明の点が多い。食草がゲットウであることが判明していた関係から、3月と8月のいずれの採集の場合も、たえず注意をおこたらずゲットウのまわりをくわしく調査してみたのであるが、わずかに1♂を得たのみである。

(27, VII.1963, 城, 1♂, 0, +)

2. *Notocrypta curvifascia* C. et R. Felder.

(クロセセリ)

前種同様、日本における代表的南方系セセリチョウであるが、前種ほどその分布が極在することはなく、大島群島以外にも、屋久島・種ヶ島・九州・四国南部等に分布している。前翅中央に比較的大きな白斑がある以外、全身真黒であるところからこの名がつけられたのであろうが、湿り気の多い川すじや木陰等でその姿を見ることが多い。大島においては、その個体数は決して少なくないとのことであったが、この度の採集では意外に少なく、わずかに2♂を得たのみである。

(28, III.1961, 東仲間, 1♂, 0, +)(27, VII.1963

西仲間, 1♂, 1, +) 以上いずれも大島。

3. *Choaspes benjaminii japonica*, Murcey.

(アオバセセリ)

新村(大島本島住用村)では比較的その個体数が多く、同地では普通であるが、その他の地方では少ない。しかし、その分布範囲は比較的広いようで、相当の範囲にわたって、本種の姿をみる事が出来た。とび方はオキナワビロウドセセリに似ているが、それよりもややかんまんである。しかし、♂の占有性は逆にオキナワビロウドセセリよりもはるかに強いようで、同一場所に、何度となくまいもどるのがみられた。

(26, VII.1963, 新村, 1♀, 0, +)(25, III.1961湯湾, 1♂, 0, +)(26, III.1961, 湯湾, 2♀♀, 0, +)(28, III.1961, 東城, 1♀, 0, +)(24, III.1961, 新村, 2♂♂, 1♀, 0, +) 以上大島。(18, III.1961 犬田布, 1♂, 0, +) 以上徳之島。

4. *Hasora chromus inermis*, Elwes et Edwards.

(オキナワビロウドセセリ)

徳之島の鹿浦から犬田布岬に通じる自動車道路の右手には、きりたった山ハダにそって、ババイヤ、ソテツ、リュウキュウアザミ等が野生しており、これらの間をまるで機関銃からうち出される弾丸のように盛んにとびまわっているセセリチョウが相当数目についた。その飛び方は極めて早く、飛んでいる時には何の種類か見当もつかぬほどであるからして、採集もすこぶる困難である。本邦産セセリチョウ科中、前種アオバセセリとともに、最大種の1つであるが、その産地が極限されている関係

もあって、ごく最近まで、わが国に産することが知られていなかった種類である。本種の生活史、現地における周年発生等に関しては、まだ、採集個体の少ないことが原因して、判明していない。3月下旬~10月頃まで、断続的に成虫が採集されていることや、この度の採集個体がいずれも大破していたこと等から考え合わせると、これまで本種の越冬態として考えられていた成虫、サナギの両説の内、前者の可能性が強いようである。本種はこれまで、奄美大島と沖永良部島に産することが知られており、これで本群島5島中、3島(奄美大島、沖永良部島、徳之島)で見られることが判明した。

(19, III.1961, 犬田布, 2♂♂, 2~3, +)

5. *Pelopidas mathias oberthüri*, Evans.

(チャバネセセリ)

島内各所に普通である。

(25, VII.1963, 新村5♂♂, 2♀♀, 0~1, +)

(26, VII.1963, 新村, 6♂♂, 3♀♀, 0~1, +)

(30, VII.1963, 大朝戸, 1♂, 0, +)

6. *Parnara guttata* Bermer. et Grey.

(イチモンジセセリ)

前種と同じ所に産するが、個体数はいぢぢるしく少ない。

(26, VII.1963, 新村, 1♂, 0, +)(23, VII.1963, 小宿, 1♀, 2, +) 以上大島(19, III.1961, 犬田布, 1♀, 0, +) 以上徳之島。

Papilionidae (アゲハチョウ科)

7. *Papilio xuthus* Linne. (アゲハ)

島内至る処で多数その姿をみる事が出来る。

8. *Papilio polytes polycles* Fruhstorfer.

(シロオビアゲハ)

東洋区に広くその分布範囲をもつ本種も、日本では奄美群島にのみ見られる稀種である。現在の処、与論島、沖永良部島、喜界島等の隆起サンゴ礁の島々に分布することが知られており、これらの島々では3月下旬より、10月頃まで成虫の姿をみる事が出来る。

しかし、奄美大島や、徳之島においては、これまでに本種が分布するという確実な証拠はなく、その土着は疑問視されていたのである。徳之島においては、先年福田(Satsuma vol No. 2, 1959)によって、面縄で1♂が採集されているが、この時の個体は大破していたとのことであり、氏の意見によっても、土着しているかどうか、はっきりしないとのことであった。この度の同地での採集品は、発生したばかりと思われるごく新鮮な個体であり、この地で発生したものに相違ないと思う。又、この他にも、亀津で1♂を目撃しており、これらの事実から考えて、非常にわずかではあるが、本種が奄美群島中、徳之島にも産することは、まずまちがいないと思わ

れる。いずれにしろ、地理的に大変かけはなれている沖永良部、喜界の両島に多産するシロオビアゲハが、両島のほぼ中央に存在する徳之島や、喜界島とはつい目と鼻の先にある大島には産しないか、又はたとえ土着しているとしても、その個体数が極端に少ないということは、前者2島がいずれも隆起サンゴ礁の島であるのに対して、後者がそうでないことと考えあわせると、大変興味のあることである。

(14, Ⅲ.1961, 和泊, 7♂♂, 2♀♀, 0~1, #)
(15, Ⅲ.1961, 和名, 3♂♂, 0~1, #) (17, Ⅲ.1961, 和泊, 21♂♂, 2♀♀, 0~1, #) 以上沖永良部島。(20, Ⅲ.1961, 面縄, 1♂, 0, +) (21, Ⅱ.1961, 亀津1♂, 目撃, 0?) 以上徳之島。(28, Ⅷ.1963, 赤連, 21♂♂, 2♀♀, 0~2, #) (29, Ⅶ.1963, 大朝戸, 8♂♂, 3♀♀, 0~3, #) (30, Ⅶ.1963, 羽里, 5♂♂, 1♀, 0~3, #) 以上喜界島。
9. *Papilio memnon thunbergii* von Siebold.

(ナガサキアゲハ)

本種はモンキアゲハと共に年々北上をつづけている代表的種類の1つであり、最近になって、島根、鳥取、広島、和歌山等の諸県下にも土着していることが判明した。兵庫県においても、最近赤穂市で数頭の採集記録があり、これらの事実より、この地に土着している可能性ももたれている。今の処関東をはじめとする東北、北海道等の東日本には、ほとんど本種の採集された記録はなく、分布している可能性はない。しかし、本州以北では、極めて稀れである本種も、奄美群島にいたれば最も多産するアゲハチョウの1つとなり、各地で、内地ではとうていみることの出来ぬほど白斑の発達した♀を、多数みかけることが出来る。飛び方は、モンキアゲハ等に比べるとかんまんであり、採集は比較的容易である。本種の♀には、遺伝的な2型として、古くから有尾、無尾の両型が知られているが、日本産のものは、すべて無尾型であり、有尾型としては、1961年10月7日宮崎県宮崎郡“子供の国”遊園地内で採集された唯一の記録があるのみである。(Tyo to Ga, vol. XIII pt1. 1963)したがって、この度の採集品はすべて無尾型であるが、いずれも新鮮で、羽化後まもない個体のように思われた。

(14, Ⅲ.1961, 和泊, 1♂, 0, +) (17, Ⅲ.1961, 和泊, 1♂, 0, +) 以上沖永良部島。(18, Ⅲ.1961, 鹿浦, 3♂♂, 1♀, 0~1, #) (19, Ⅲ.1961, 面縄, 1♂, 1♀, 0~1, #) 以上徳之島。(25, Ⅲ.1961, 湯湾, 1♂, 0, #) (26, Ⅲ.1961, 湯湾, 1♀, 0~1, #) (31, Ⅲ.1961, 小湊, 4♂♂, 5♀♀, 0~2, #) (1, Ⅳ.1961, 小湊, 1♂, 0 #) (2, Ⅳ.1961, 浦上, 1♀, 6♂♂, 0~3, #) (23, Ⅶ.1963, 小宿, 1♀, 1+) (25, Ⅶ.1963, 新村, 3♂♂, 1♀, 0~3, #)

(26, Ⅷ.1963, 新村, 1♂, 2♀♀, 0~3, #)

(1, Ⅷ.1963, 浦上, 1♂, 2, +) 以上奄美大島。

(29, Ⅷ.1963, 大朝戸, 1♂, 1, +) (30, Ⅶ.1963, 羽里・川嶺, 1♂, 2♀♀, 0~3, #) 以上喜界島。

10. *Papilio hele nus nicconicolens* Butler.

(モンキアゲハ)

島内至る所に多産し、特に部落内の樹木付近に多い。2回の採集調査において、その採集記録が少ないのは、本種がアゲハチョウ科中、最もそのとび方が早く、極めて採集困難であるためであり、決して個体数の少ないことに原因しているのではない。

(18, Ⅲ.1961, 鹿浦, 1♀, 0, +) (20, Ⅲ.1961, 面縄, 1♂, 1♀, 0~1, #) 以上徳之島。(15, Ⅲ.1961, 知名, 1♂, 0, +) 以上沖永良部島。(25, Ⅲ.1961, 湯湾, 1, #) (26, Ⅲ.1961, 湯湾, 4♂♂, 1♀, 0~2, #) (27, Ⅲ.1961, 湯湾, 1♂, 1♀, 0~1 #) (28, Ⅲ.1961, 東仲間, 1♂, 0 #) (29, Ⅲ.1961, 城, 3♂♂, 1♀, 0~2, #) (30, Ⅲ.1961, 朝戸, 3♂♂, 0~2, #) (31, Ⅲ.1961, 小湊, 1♂, 2, #) (1, Ⅳ.1961, 名瀬, 1♂, 1♀, 0~2, +) (2, Ⅳ.1961, 浦上, 2♂♂, 0~2, #) (26, Ⅶ.1963, 新村, 1♀, 2, +) (27, Ⅶ.1963, 西仲間, 2♂♂, 0~2, +) 以上大島。(29, Ⅶ.1963, 大朝戸, 1♂, 1, +) (30, Ⅶ.1963, 羽里, 1♂, 目撃, 0, ?, +) 以上喜界島。

11. *Papilio protenor demetrius* Cramer.

(クロアゲハ)

本州に産する個体に比べて、翅表の赤斑の発達がいちぢるしく、特に♀にその傾向が顕著であるため、一見すると別種のような錯覚におちいることがある。この度の2回の採集を通じて得られた個体は以外に少なく、特に夏の喜界、春の沖永良部では、その個体すら見ることが出来なかった。

(18, Ⅲ.1961, 鹿浦, 1♂, 0, +) (20, Ⅲ.1961, 面縄, 3♂♂, 0, +) 以上徳之島。(25, Ⅲ.1961, 田検, 1♂, 0, +) (29, Ⅲ.1961, 城, 1♂, 2, +) (2, Ⅳ.1961, 浦上, 1♀, 0, +) (24, Ⅶ.1963, 朝戸, 1♀, 0, +) (25, Ⅶ.1963, 新村, 3♂♂, 0~2, #) (26, Ⅶ.1963, 新村, 2♂♂, 1~2, #) 以上大島。

12. *Papilio bianor dehaanii* C. et R. Ferder.

(カラスアゲハ)

春期には、比較的多産することが知られた本種も、8月には、ほとんどその姿を見ることが出来ず、わずかに採集された個体も大破しているものが多く、ちょうど発生期の中間にあたった感があった。

(18, Ⅲ.1961, 鹿浦, 4♂♂, 1♀, 0~2, #)

以上徳之島。(25.Ⅲ.1961、田検、4♂♂、0~2、
 卅)(26.Ⅲ.1961、湯湾、8♂♂、0~2、#)(29、
 Ⅲ.1961、城、1♂、0+) (27.Ⅲ.1961、湯湾、2♂♂、
 0~2、#)(28.Ⅲ.1961、東仲間、1♂、0、
 +)(30.Ⅲ.1961、朝戸、3♂♂、1♀、0~2、卅)
 (2.Ⅳ.1961、浦上、1♂、0~1、+)以上大島。

13. *Graphium sarpedon nipponum* Fruhstorfer.
 (アオスジアゲハ)

島内いたる所に分布しているが、夏春とも個体数は多
 くなかった。(20.Ⅲ.1961、2♂♂、面縄、0、)以
 上徳之島。(25.Ⅲ.1961、田検、2♂♂、1♀、0~
 1、卅)(26.Ⅲ.1961、湯湾、1♂、0+) (29.Ⅲ.
 1961、朝戸、1♂、0、+) (30.Ⅲ.1961、朝戸、3
 ♀♀、0、+) (31.Ⅲ.1961、小湊、1♂、0、+)
 (2.Ⅳ.1961、浦上、1♀、0、+)以上大島。

14. *Byasa alcinous loochooana* Rothschild.
 (ジャコウアゲハ)

本種は北海道をのぞいて、本州以南の日本全土にわた
 って、広く分布している種であるが、一般に南部に行く
 にしたがって、その個体数を増す。奄美群島産のもの
 は、本州産のものに比べて暗化の傾向が強く、別亜種
 とされている (subsp. *loochooana* Rothschild)。本邦
 産アゲハチョウ科中では、最もその発生が早く、奄美地
 方では、2月下旬ごろからすでに成虫の姿をみうけるこ
 とが出来るとのことであり、したがって3月下旬には、
 すでに第一化はおせんしており、特に♂ではその大半が
 大破していた。奄美群島においては今の処、与論島、喜
 界ヶ島をのぞくこのり3島にその分布が知られており、
 これらの島々では極めて多産する。

(14.Ⅲ.1961、2♀♀、1~2、+) (15.Ⅲ.1961、
 2♂♂、4♀♀、0~3、卅)以上沖永良部島。(18、
 Ⅲ.1961、犬田布、4♂♂、8♀♀、0~3、卅)(20、
 Ⅲ.1961、面縄、7♀♀、0~3、卅)(21.Ⅲ.1961、
 亀津、2♀♀、1~2、+)以上徳之島。(23.Ⅲ.1961
 新村、2♂♂、2~3、卅)(26.Ⅲ.1961、湯湾、1
 ♀、1卅)(28.Ⅲ.1961、東仲間、3♂♂、1~3、
 卅)(29.Ⅲ.1961、城、2♂♂、1~3、卅)(30、
 Ⅲ.1961、朝戸、1♂、2♀♀、0~2、卅)(31.Ⅲ.
 1961、小湊、1♀、0、卅)(24.Ⅶ.1963、小湊、3
 ♀♀、4♀♀、0~1、#)(23.Ⅶ.1963、小宿、1
 ♀、0、+)(25.Ⅶ.1963、新村、1♂、0、+) (26、
 Ⅶ.1963、4♂♂、1♀、0~2、卅)(27.Ⅶ.1963、
 西仲間、1♂、1♀、0、+)以上奄美大島。

Pieridae (シロチョウ科)

15. *Eurema hecabe mandarina* de L. Orza.
 (キチョウ)

(17.Ⅲ.1961、犬田布、1♂、2♀♀、0~1、卅)

(18.Ⅲ.1961、鹿浦、2♂♂、2♀♀、0~2、卅)
 (19.Ⅲ.1961、犬田布、1♂、0、+) (20.Ⅲ.1961
 、面縄、2♂♂、1♀、0~1、卅)以上徳之島。
 (27.Ⅲ.1961、湯湾、1♂、1♀、0、#)(30.Ⅲ
 1961、朝戸、卅)(2.Ⅳ.1961、浦上、卅)以上大島。
 (14.Ⅲ.1961、和泊、3♂♂、2♀♀、0~1、卅)
 (15.Ⅲ.1961、知名、2♂♂、1♀、0~1、卅)以
 上沖永良部島。

16. *Hebomoia glaucippe shirozui* Kurosawa et
 Omoto. (ツマベニチョウ)

ツマベニとは前翅先端にある赤色斑より出た名であ
 り、本邦産シロチョウ科中最大の美麗種である。内地に
 産するシロチョウ科とは違い、その飛び方は極めてダイ
 ナミックでしかも早く、花に吸みつにやって来た個体以
 外は、ほとんど採集することが出来ない。しかし、ナガ
 サキアゲハやモンキアゲハでよく知られているように、
 本種にも蝶道なるものがあるらしく、場所によっては非
 常にこれがはっきりしている場合があり、こういう所
 では、1カ所に待機することにより、多数の個体を、比
 較的簡単に採集することが出来る。奄美群島のどの島に
 おいても、島内いたる処でその姿を見ることが出来るが、
 その内でも特に西仲間、城、浦上(以上大島)、羽里、
 大朝戸(以上喜界島)、犬田布、面縄(以上徳之島)等
 に多産する。春型に比べ、夏型は一般にやや灰色がら
 っており、型も相当大型である。

(18.Ⅲ.1961、鹿浦、1♂、+)以上徳之島。(31、
 Ⅲ.1961、4♂♂、2♀♀、小湊、0~2、#)(2.Ⅳ
 1961、浦上、2♂♂、1♀、0、#)(23.Ⅶ.1963、小
 湊、1♂、2、+) (24.Ⅶ.1963、朝戸、7♂♂、1
 ♀、0~3、#)(25.Ⅲ.1963、新村、2♂♂、0~
 1、+) (26.Ⅶ.1963、新村、10♂♂、2♀♀、0~
 3、#)(27.Ⅶ.1963、西仲間、16♂♂、2♀♀、0
 ~3、#)以上大島。(29.Ⅶ.1963、大朝戸、6♂♂、
 1♀、0~3#)(30.Ⅶ.1963、川嶺、2♂♂、0~
 2、#)以上喜界島。

17. *Colias erate poliographus* Motshulsky.
 (モンキチョウ)

徳之島面縄で1♂を目撃したのみで他島ではその姿を
 みるが出来なかった。

(20.Ⅲ.1961、面縄、1♂、0?、目撃)

18. *Pieris rapae crucivora* Boisduval.
 (モンシロチョウ)

前種同様個体数は少なく、ほとんどその姿をみるこ
 とが出来なかった。

Lycaenidae (シジミチョウ科)

19. *Zizeeria maha ishigakiana* Matsumura
 (ヤマトシジミ)

日本全土にわたって広く分布しており、本邦産シジミチョウ科中、最普通種の一つである。奄美群島においても各島に普通に見られるが、特に荒地や海岸の草原に多いようである。大島産のものは、内地産のものにくらべてそのルリ色の発達がよわく、翅表面全体が、やや白っぽい感じがし、又最外線の黒帯はうすく、不明瞭である。さらに後翅外縁の黒紋列は表われないか、又たとえ表われたとしても極めてうすく、前者とは相当の差異がみられるので別亜種 (subsp. ishigakiana Matsumura.) とされている。

(14, Ⅲ.1961, 和泊, 4♂♂, 0~1, #) (15, Ⅲ.1961, 知名, 1♂, 0, #) (17, Ⅲ.1961, 和泊, 4♂♂, 1♀, 0~1, #) 以上沖永良部島。(19, Ⅲ.1961, 朝戸, 3♂♂, 0~1, #) (25, Ⅲ.1961, 湯湾, 2♂♂, 1♀, 0~1, #) (1, Ⅳ.1961, 名瀬, 15♂♂, 3♀♀, 0~2, #) (26, Ⅶ.1963, 新村, 5♂♂, 1♀, 0~1, #) 以上大島。(30, Ⅶ.1963, 赤連, 5♂♂, 2♀♀, 0~2, #) (31, Ⅶ.1963, 湾, 3♂♂, 2♀♀, 0~2, #) 以上喜界島。

20. *Zizina otis riukuensis* Matsumura.

(シルビアンジミ)

本種も前種同様、本州産の個体 (subsp. eme-lina de l' Orza) に対して、奄美群島産のそれは、別亜種 (subsp. riukuensis Matsumura.) とされている。前種ヤマトシジミと同様、路へきや海岸にその産地が多く知られているが、食草の関係から前種に比べて、その産地はより局地的傾向が強い。しかし、産地には決してその個体数は少なくはなく、特に面縄 (徳之島) の海岸には、前種よりもはるかに多数の個体が産し、食草リュウキュウマゴヤシ (本州ではミヤコグサが食草として知られているが、これは、奄美群島では見られない) のまわりを、盛んに飛びまわっていた。

(15, Ⅲ.1961, 知名, 1♂, 0, +) (14, Ⅲ.1961, 和泊, 2♂♂, 0~1, +) 以上沖永良部島。(19, Ⅲ.1961, 犬田布, 1♂, 2♀♀, 0, +) (20, Ⅲ.1961, 面縄, 18♂♂, 5♀♀, 0~1 #) 以上徳之島。

21. *Lampides boeticus* Linne.

(ウラナミシジミ)

アマミウラナミシジミに比べてその個体数は多く、特に夏期には多数の個体を目撃することが出来た。いずれも畑地や家の垣根のまわりに栽培されているマメ科植物のまわりを、盛んに飛びまわっていた。

(16, Ⅲ.1961, 和泊, 1♂, 1, +) 以上沖永良部島。(23, Ⅶ.1963, 小宿, 1♀, 0, +) (1, Ⅷ.1963, 浦上, 目撃, #) (24, Ⅶ.1963, 小湊, 1♂, 1♀, 0, #) 以上大島。(30, Ⅶ.1963, 羽里, 1♂, 0, #) (28, Ⅶ.1963, 赤連, 1♂, 2♀♀, 0, #) 以

上喜界島。

22. *Hacaduba kurava septentrionalis* Shirôzu.

(アマミウラナミシジミ)

アマミの名が示す通り、日本では奄美群島にのみしか生そくが知られていない稀種であるが、同地では、ヤマトシジミ、シルビアンジミ、ウラナミシジミ等について個体数の多い種類である。飛び方は近似種ウラナミシジミよりもややかんまんであり、特に朝夕には草上に静止することが多く、こういう場合には少々近づいても逃げることはない。食草モクダチバナの付近に、その姿を見うけることが多いことから考えて、食草からはあまり遠くへ行かぬようである。奄美大島では11月から2月にかけての冬の寒冷期を除いて、周年その姿を見ることが出来るが、3月におとずれた時には、前後翅とも青色部の大変よく発達した個体が得られたのに対して、7月のそれは、その発達がいちぢるしく悪く、又裏面波状斑のみだれは小さい。

(18, Ⅲ.1961, 犬田布, 1♂, 2, +) (20, Ⅲ.1961, 面縄, 1♀, 1, +) 以上徳之島。(23, Ⅲ.1961, 新村, 1♀, 1♂, 0~2, +) (2, Ⅳ.1961, 浦上, 1♀, 0, +) (25, Ⅶ.1963, 新村, 2♀♀, 1♂, 0, +) (26, Ⅶ.1963, 新村, 2♀♀, 1♂, 0~1, +) (24, Ⅶ.1963, 朝戸, 1♀, 0, +) (1, Ⅷ.1963, 浦上, 1♀, 0, +) 以上大島。

23. *Naratura gaponica* Murray.

(ムラサキシジミ)

今回の採集個体は越冬したものであろう。他の島では発見出来なかった。(28, Ⅲ.1961, 東城, 0, +) 大島

Danaidae (マダラチョウ科)

24. *Radena similis* Linne.

(リュウキュウアサギマダラ)

現在わが国に定着しているマダラチョウ科は、アサギマダラとリュウキュウアサギマダラのわずかに2種類を数えるのみである。前者は日本全土にわたって広くその分布範囲をもっており、兵庫県下でもしばしばその優姿をみることが出来るのに対して、後者は大島群島、それも徳之島と大島にのみ見られる純南方系の蝶である。台湾、フィリピン等の南方諸島では本種の近縁種であるコモアサギマダラ、ウスコモアサギマダラ等と共に多産することが知られている。成虫越冬であるがために、3月には場所によっては、本種の大集団がみられ、城、犬田布等では、1枝をたたけば、同時に数10頭が飛び出すといった、すばらしい光影に接することが出来た。島内至る所にその姿を見ることが出来、その飛び方は、アサギマダラに比べて、きわめてかんまんであるがために、発見すれば採集は容易である。しかし、7月には安

外にその個体数は少なく、第一化と第二化の中間であったように思われた。

(19, Ⅲ.1961, 犬田布, 3 ♀♀, 0~2, #) (20, Ⅲ.1963, 面縄, 3 ♂♂, 0~1, #) 以上徳之島。
(29, Ⅲ.1961, 城, 8 ♂♂, 11 ♀♀, 0~2, #) (30, Ⅲ.1961, 朝戸, 1 ♂, 0, +) (31, Ⅲ.1961, 小湊, 2 ♂♂, 0~1, #) (1, Ⅶ.1963, 浦上, 1 ♀, 0, +) (24, Ⅶ.1963, 朝戸, 1 ♀, 1, +) 以上奄美大島。

25. *Caduga sita nipponica* Moore.

(アサギマダラ)

沖永良部、大島で得ることが出来たにもかかわらず、他の島ではその姿をみる事が出来なかった。島内には広く分布しているようであるが、リュウキュウアサギマダラに比べてはるかに個体数は少なく、又採集もやや困難である。

(14, Ⅲ.1961, 和泊, 1 ♀, 0, +) (17, Ⅲ.1961, 和泊, 1 ♂, 0, +) 以上沖永良部島。(25, Ⅲ.1961, 湯湾, 1 ♂, 0, #) 以上大島。

26. *Limnas chrysippus* Linne.

(カバマダラ)

福田(1962 Satsuma, 10周年記念号)によると、大島群島においては、現在の処、与論、沖永良部、徳之島、大島等の島々で採集された記録があるとのことであり、その内、沖永良部、大島の両島では幼虫も相当数得られているようである。又最近、名瀬市郊外では、越冬中の個体が発見されており(久保)、これらの地方では土着しているとのことである。しかし、本種が喜界島で採集された記録は今だに発見されておらず、この度の採集記録が初めてだと思う。採集個体中の1 ♂は赤連の部落内に咲いていたゲットウの花に、夕方吸みつにやって来た処を捕えたものであり、残りの1 ♀は、ユッカやリュウゼツランの野生している赤連の海岸をゆっくりとまわっている処を捕えたものである。いずれも、新鮮であり、発生後間もないもののように思われた。近縁のスジグロカバマダラやオオカバマダラ等が、1カ所に多発する性質をもっていることから、この度も、採集地付近にまだ採集される可能性があったので、草原のまわりを詳細に調査してみたが、以上2頭以外は、発見することが出来なかった。したがって、この度の採集例のみより、本島における本種の土着をうんぬんすることは、ナンセンスではあるが、大島の例とも考え合わせてみると、その可能性は大きい。今後採集者の増加によって、採集例も増えることであろうし、そうなれば、もっとはっきりしたことがわかると思う。なお、本種の食草はゲットウ(ガガイモ科)であり、これは部落付近に多数栽培されている。

(28, Ⅶ.1963, 赤連, 1 ♂, 0, +) (30, Ⅶ.1963, 湾, 1 ♂, 0, +) 以上喜界島。(17, Ⅶ.1963, 西仲間, 1 ♂目撃, +) 以上大島。

Libytheidae (テングチョウ科)

27. *Libythea celtis amamiana* Shirôzu.

(テングチョウ)

日本に産する *Libythidae* は1科、1属、1種であるが、その分布は広く、北は北海道から、南は大島群島まで日本全土にわたって、その生そくが知られている。奄美群島産のものはそれ以北の個体に比べて、やや大型となり別亜種(subsp. *amamiana* Shirôzu.) とされている。本種は他の多くのタテハ類でみられるように、成虫越冬であり、5月と9~10月にかけて、成虫を採集することが出来る。したがって3月には越冬した大破個体がみられるのみであった。

(27, Ⅲ.1961, 湯湾, 1 ♂, 0, +) (28, Ⅲ.1961, 東城, 1 ♂, 0, +) (29, Ⅲ.1961, 城, 2 ♂♂, 1 ♀, 1~2, #) (31, Ⅲ.1961, 小湊, 2 ♂♂, 1 ♀, 1~2, #) (2, Ⅳ.1961, 2 ♂♂, 1~2, +) 以上いずれも大島。

Nymphalidae (タテハチョウ科)

28. *Argyreus hyperbius* Linne.

(ツマグロヒョウモン)

現在、日本に産することの知られているヒョウモン類は全部で9属17種であるが(Melitaea 3, Clossiana 3, Benthis 2, Argynnis 2, Damora 1,

Argyronome 2, Fabriciana 2, Mesoacidalia 1, Argyreus 1) 北方系の種がその大半を占め、日本に産する種類にごく近縁の種が、又はまったく同一種が満州、支那、ヒマラヤ、カラフト、シベリア等のアジア大陸北部に広く分布している場合が多い。したがって南国、奄美群島ではわずかに本種1種を産するのみであり、この地では本種が唯一のヒョウモンチョウとなっている。しかし、その個体数は以外に多く、同地では最普通種の1つとなる。♀の前翅先端には黒色斑が発達しており、一見して♂♀の区別は容易である。島内いたる処に見られるけれども、部落内よりもむしろ畑地等に多いようである。本種はつい先年前までは、兵庫県下においては、秋期以外あまり採集された記録がなく、同じ近畿地方においても、京都府と滋賀県には産しないものとされていた。しかし、近年になって、県下においても、初夏から秋にかけて毎年その姿を見受けることが出来るようになったし(赤穂地方)、又比良山頂(滋賀県)でもかなりの個体を採集しており(9~10, Ⅶ.1963, I.I.) モンキ、ナガサキ等のアゲハ類と同様、本種もかなりのスピードで、北上をつづけているものと思われる。

(14, Ⅲ.1961, 和泊, 2 ♀♀, 0, #) (17, Ⅲ.

1961、和泊、4♂♂、0~2、+）以上沖永良部島。
 (19、Ⅲ.1961、犬田布、1♂、2、+)以上徳之島。
 (27、Ⅲ.1961、湯湾、1♀、0、+) (31、Ⅲ.1961、小湊、2♂♂、1♀、0~2、+) (2、Ⅳ.1961、浦上1♀、0、+) (24、Ⅶ.1963、朝戸、2♀♀、0、+) (26、Ⅶ.1963、新村、1♂、1、+)以上大島。
 (30、Ⅶ.1963、羽里、1♂、0、+) (28、Ⅶ.1963、赤連、1♀、日撃、0?)以上喜界島。
 29. *Vanessa indica* Herbst.

(アカタテハ)

個体数は以外に少なく、小湊(大島)で1♂を得たのみであった。

(31、Ⅲ.1961、小湊、1♂、0、+)

30. *Kaniska canace siphnos* Fruhstorfer.

(ルリタテハ)

内地産のもの(subsp. no-japonicum von Siebold.)に対して、大島群島のは別亜種(subsp. siphnos Fruhstorfer)とされている。島内に広く分布しているようであるが個体数は少なく、しかもその飛び方が早いことも原因して採集個体は少なかった。3月には秋型の越冬個体(大破)に対して、新鮮な夏型の個体もある程度得ることが出来ることからして、かなり早くから第一化が出現するようである。現在の処、喜界、沖永良部、大島の3島からは採集された記録が見られるが、不思議と徳之島には採集された記録がなく、(日本蝶類分布表:白水隆)、この度の採集記録が初めてのようと思われる。

(15、Ⅲ.1961、和泊、1♂、1、+)以上沖永良部島
 (20、Ⅲ.1961に面縄、1♀、0、+) (18、Ⅲ.1961、犬田布、1♂、1、+)以上徳之島。(1、Ⅳ.1961、小湊、1♀、0、+) (1、Ⅷ.1963、浦上、1♂、日撃、0?、+)以上大島。

31. *Cyrestis thyodamas mabella* Fruhstorfer.

(インガケチョウ)

個体数は以外に少なく、8月にはその姿すら見ることが出来なかった。この度の採集個体は、和歌山県那智産のもの(28.VII.1960)に比べて、いずれも翅表の黒色部分があうすく、一見して越冬した冬型であることがわかる。今まで、大島、沖永良部においては毎年、相当数の個体が採集されているようであるが、その他では採集されておらず、今回も発見することが出来なかった。

(25、Ⅲ.1961、田検、1♀、1、+) (26、Ⅲ.1961、1♂、湯湾、1♂、+) (27、Ⅲ.1961、湯湾、1♂、0、+) (28、Ⅲ.1961、東城、1♂、1、+) (2、Ⅳ.1961、浦上、2♂♂、2♀♀、0~2、+)以上いずれも大島。

32. *Precis almana* Linne.

(タテハモドキ)

北海道、本州、四国には産地が知られず、内地では九州の南端、鹿児島県佐多岬や薩摩半島にのみ土着することの知られている稀種であるが、大島群島においては、ごく普通に見られる。食草がイワダレソウである関係から、亜熱帯植物が多数生い茂っている部落内よりも、むしろ畑地等で本種の姿を見掛けることが多く、夏期には取入れのすんだ稲田で、無数に飛んでいる本種を見ることが出来た。翅斑上における季節の変異は著しく、3月採集の個体は、翅の切れこみが8月のそれに比べて相当強く、又裏面眼状斑は喪失して枯葉状を示す。なお、徳之島、大島、沖永良部島においては、この他本種に近縁のアオタテハモドキ(*Precis orithya* Linne)が産することが知られており、特に徳之島犬田布岬では多数の採集記録がある。(福田、Satsuma, vol.Ⅷ.No.2)。したがって本種が当地方に土着していることも十二分に考えられたわけであり、このことがこの度の分布調査の大きな目標の一つでもあったわけであるが、時期的にみればほとんど同じ61年には、その姿を全然見ることが出来なかった。本種が、タテハモドキに比べて、はるかに移動性が強く、又遠方より飛来した個体による一時的な多産の例も、これまでに多数見られることからして、この度の多発も、一時的なものであったと考える方が妥当のようである。

(24、Ⅶ.1963、朝戸、4♂♂、1♀、0~2、+)

(23、Ⅶ.1963、小宿、2♂♂、0~1、+) (25、Ⅶ.1963、新村、1♂、0、+) (26、Ⅶ.1963、新村、3♂♂、0~1、+) (1、Ⅷ.1963、浦上、10♂♂、2♀♀、0~2、+) (28、Ⅲ.1961、東仲間、4♂♂、1♀、+) (29、Ⅲ.1961、城、2♂♂、3♀♀、0~3、+) (30、Ⅲ.1961、朝戸、3♂♂、2♀♀、0~3、+)以上大島。(14、Ⅲ.1961、和泊、3♂♂、1~3、+) (15、Ⅲ.1961、知名、2♂♂、1~2、+) (16、Ⅲ.1961、和泊、1♂、1、+)以上沖永良部島。

(18、Ⅲ.1961、鹿浦、1♂1♀、1~3、+) (20、Ⅲ.1961、面縄、3♂♂、3♀♀、0~3、+)以上徳之島。(28、Ⅶ.1963、赤連、5♂♂、1♀、0~2、+) (29、Ⅶ.1963、大朝戸、3♂♂、4♀♀、0~3、+) (30、Ⅶ.1963、川嶺、羽里、4♂♂、1♀、0~3、+)以上喜界島。

33. *Neptis hylas luculenta* Fruhstorfer.

(リュウキュウミスジ)

奄美群島の特産種であり、同地において、内地のコミスジに相当する種類である。翅斑はコミスジに酷似しており、外面上からは両者を区別することは困難のようである。又その性質もコミスジに大変よく似ており、特有の小さな翅をこきざみにふるわせながら、ゆっくりと、樹木の上を飛んでいるのが見られる。現在の処、大島、

徳之島、沖永良部島の3島に分布していることが知られており、これら3島には定着していることが判明しているが、喜界においては確実な採集記録がなく、産するかどうか不明である。今回の採集調査においても、同島では採集出来なかった。しかし、喜界島には、前後2回の調査の内、夏期のみしか訪ずれておらず、この時には、春期相当の個体数をみることの出来た他の3島においても、ほとんどその姿を見ることが出来ず、この点まだある程度の可能性は残されているわけであり、今後もっとくわしく調査すれば、あるいは産することが判明することも知れない。

(14, Ⅲ.1961, 和泊, 1♀, 0, +) (15, Ⅲ.1961, 知名, 3♂♂, 2♀♀, 0~1, +) (17, Ⅲ.1961, 和泊, 1♂, 1♀, 0~1, +) 以上沖永良部島。
(19, Ⅲ.1961, 犬田布, 1♂, 0, +) (20, Ⅲ.1961, 面縄, 2♂♂, 1♀, 0~1, +) 以上徳之島。(27, Ⅲ.1961, 湯湾, 1♂, 0, +) (28, Ⅲ.1961, 城, 2♂♂, 1♀, 0~1, +) (31, Ⅲ.1961, 小湊, 1♂, 0, +) (1, Ⅳ.1961, 浦上, 3♂♂, 1♀, 0~3, +) (24, Ⅶ.1963, 朝戸, 2♂♂, 1♀, 1~3, +) (26, Ⅶ.1963, 新村, 2♀♀, 1♂, 1~3, +) (1, Ⅷ.1963, 浦上, 1♂, 2, +) 以上大島。

Satyridae (ジャノメチョウ科)

34. *Melanitis leda* Linne.

(ウスイロコノマチョウ)

日本国内において、現在知られているコノマチョウは本種の他には、クロコノマチョウがいるのみである。本種が奄美群島にのみ産するのに対して、クロコノマチョウは、それ以外の屋久島、九州、四国等に広く分布していることが知られており、東北地方での採集記録もなく、ちょうどコミスジとリュウキュウミスジの間に見られる如く、すみ分けのような関係にあるようである。本種には、クロコノマチョウに見られるような著しい季節的変異はないにしても、寒冷期に採集されるものと夏期に採集されるものとの間には、はっきりとした雌雄上の区別がある。3月には越冬した冬型の大破個体が、民家のまわりや、すでに数cm程度に伸びた苗代のまわりの草むらで採集することが出来るのに対して、夏期には樹下や墓地で、その姿を多く見ることが出来る。

(23, Ⅲ.1961, 新村1♀, 2, +) (26, Ⅲ.1961, 湯湾, 1♂, 1♀, 1~2, +) (30, Ⅲ.1961, 朝戸, 2♂♂, 2, +) (1, Ⅲ.1961, 小湊, 1♂, 2, +) (24, Ⅶ.1963, 名瀬, 1♂, 0, +) (25, Ⅶ.1963, 新村, 1♀, 0, +) 以上大島。(14, Ⅲ.1961, 和泊, 1♂目撃, 2?, +) 以上沖永良部島。

35. *Mycalesis jotama madjicosa* Butler.

(ヒメジャノメ)

(23, Ⅲ.1961, 新村, 1♂, 0, +) (28, Ⅲ.1961, 城, 1♂, 1♀, 0, +) (29, Ⅲ.1961, 城, 1♂, 1♀, 0~1, +) (1, Ⅳ.1961, 小湊, 1♂, 0, +) 以上いずれも大島。

以上春夏2回の調査において採集することの出来た蝶類をまとめてみたのであるが、時間の関係もあって、春期には大島、沖永良部、徳之島の3島、夏期には喜界島と大島の2島にしか足をのぼすことが出来なかったため、甚だ不完全なものとなってしまったことは事実で、これらは今後の調査で補ぎなっていきたいと思っている。なお、本文採集記録中、1・2・3・0等の番号は個体の新鮮度を、+、+、+等の記号は個体数を表わしており、0(新鮮)、1(小破)、2(中破)、3(大破)、+ (少ない)、+ (普通)、+ (多産)の意味である。

参 考 文 献

1. 福田晴夫(1959): 春の徳之島蝶類報告。
(SATSUMA, 21, :1~11)
2. 田中洋・田中章(1959): 喜界島・与論島の蝶の採集記録 (SATSUMA, 22, 16~17)
3. 久保邦照(1960): カバマダラに関する知見(1)。
(SATSUMA, 23, :44~48)
4. 久保邦照(1960): 徳之島・沖永良部の蝶。
5. 久保邦照(1960): カバマダラに関する知見Ⅱ。
(SATSUMA, 26, :20~23)
6. 久保邦照(1960): 沖永良部におけるウスイロコノマチョウの採集記録。(SATSUMA, 26, :28)
7. 中谷貴寿・小橋益夫(1962): 日本におけるナガサキアゲハ有尾型の記録。(Tyo to Ga, 13(2):28~29)
8. 福田晴夫・田中洋(1962): 鹿児島島の蝶類。
9. 白水 隆(1961): 日本産蝶類分布表。
10. 白水 隆(1961): 原色昆虫図鑑、第一巻
(蝶、蛾篇)の蝶の部(北隆館):1~83